

Title	書評リプライ：ドキュメントとストーリー：水野節夫氏の拙著書評に寄せて
Sub Title	
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2013
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.18 (2013. 7) ,p.146- 150
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル：「著者リプライ：」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20130706-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評リプライ :

ドキュメントとストーリー—水野節夫氏の拙著書評に寄せて—

有末 賢

拙著『生活史宣言—ライフヒストリーの社会学—』に対して、水野節夫氏には誠意あふれる「書評」を本誌にお書きいただいたことについて、まず心から感謝したい。拙著が、初出から 30 年以上もかかって、ようやく一書にまとめられたことからわかるように、決して読みやすい本とは言えない。水野氏は、私が大学院生の頃から、法政大学市ヶ谷キャンパスなどでの研究会¹⁾にも参加させていただいて、学問的に鍛えていただいた「学兄」あるいは「恩師」と言っても良いかもしれない。この『生活史宣言』の行間やページの余白までも読んでいただける数少ない読者であると信じている。そういう方に書評をお願いすることができて、望外の幸せであった。

この書評リプライでは、水野氏の提起された「ライフ・ドキュメント的主観性」の切り口について、主に水野氏のコメントから考えたことを述べていきたいと考えている。しかし、その前に、【2】で水野氏が拙著の成果として挙げていただいた 3 点について、非常に的確な読み取り方であるので一言述べておきたい。第一の「個性と時代性」「個性と時代状況」を両睨みするという視座は、筆者がオーラル・ヒストリーや歴史学、思想史などの分野から学んだ視座が基本になっている。ライフヒストリーを研究する場合、歴史や時代性は常識的にも重要な要素であるが、最近の「ライフ・ストーリー」研究者の場合は、大きな時代の文脈や歴史性を意識することなく、対象者にインタビューしていくケースも見られる。「ポスト・モダン」という時代状況を反映しているのかもしれないが、大きな「物語」(ストーリー)が終焉したからこそ、小さな物語(ストーリー)にも歴史性は潜んでいる。その意味でも、個性と時代性は、両面視座で見ていく必要があるのではないだろうか。第二の「口述とオーラリティ」論の一環としての「語られないこと」「語り得ないこと」の存在については、「死別」「死者」の問題を抱え込んだという経験が大きいと思われる。「語りかけることができない」「語りが存在しない」という経験は、私に「沈黙」の意味について深く考察する機会を与えてくれた。最近、私は「語りにくいこと—自死遺族たちの声—」²⁾という原稿を執筆したが、「語り得ないこと」「語られないこと」だけではなく、もう一步進めて、「語りにくいこと」についても考えていかなければならない、と思っている。そして、第三点目が「ライフ・ドキュメント的主観性」の提起している切り口³⁾であるが、私は、ライフ・ドキュメントの主観性を「ライフ・ストーリー的主観性」と比較対照しながら、論じている。この点については、次に詳しく述べるが、構築主義対本質主義の理論的構図が背景としては存在していたかもしれない。つまり、ライフ・ドキュメントで

有末賢「書評リプライ：ドキュメントとストーリー—水野節夫氏の拙著書評に寄せて—」

『三田社会学』第 18 号 (2013 年 7 月) 146-150 頁

イメージしていたのは、ストーリーの構築以前の「本質」のようなものを想定していた、のかもしれない。そのことが、稲垣尚友氏のライフ・ドキュメント的主観性の解釈に対して、微妙な《ずれ》や《ぶれ》を生じさせた、とも言えるのではないか、水野氏のコメントやご指摘、疑問を読みながら、感じたことを検証してみたい。

水野氏が正確に指摘しているとおりに、ライフ・ストーリーの主観性と比較して、ライフ・ドキュメントの主観性の特徴は、第一に、「過去よりは現在と将来の生活設計にかかわる事柄から主観的リアリティが再構成される傾向」がある。また第二に、「リアリティの再構成に際しての『正当化の装置』が必ずしもライフ・ドキュメントの主観性には貫徹されてはいない」で、「《正当化しえない葛藤や矛盾》が滲み出ている場合もある」と述べた。さらに、第三点目として「《重要な他者》にかかわる問題でも、ライフ・ドキュメントの主観性にとっては、生活史全体の中での位置づけは未確定のまま、あくまで当事者が生きている《現時点での「自己と他者」との抜き差しならない関係性》が注目されるのである。」と私は述べた。この三点の指摘の背景には、現象学的解釈の二つの面が内包されている。つまり、意味体系の獲得や生活世界への着目は、E.フッサールやA.シュツの現象学的還元や、意味の《本質》への探究が下敷きとなっている。すなわち、ストーリー構築以前の、あるいは、事象そのものの《本質》への欲求である。しかし、現象学の到達した見地は、どこまでいっても、認識の構築性や相互主観的なリアリティの構築があり、《本質》などというものの存在を否定する方向に向かっていくわけである。

このような現象学的考察の「当てはめ」が「図 10-1 ライフ・ドキュメントのリアリティ構成」に見られる。確かに、この図の構成において、生活史の諸相の次元は、「図 2-2 生活の歴史的研究の布置連関」を応用し、リアリティの諸相は、江原由美子『生活世界の社会学』（1985年）の「生活世界の意識のあり方」から借用している⁴⁾。そして、テキストを稲垣尚友『悲しきトカラ』（1980年）という稲垣が書いた「日記」に固定して、その中の記述から、それぞれの枠の中に、『悲しきトカラ』の記述や内容を「当てはめ」たのが、図 10-1 である。水野氏のご指摘のように、どのボックスにどのような内容のものを「マッピング」的に入れ込んだか、と言う点について概略的説明がいわば「総花的」になされていて、「整理軸」や「分析軸」を設定したことの効用が伝わってこない、という難点がある。この点の「反省」は、もともと、ライフ・ドキュメントとしての「資料」を「日記」に固定したわけだが、この図 10-1 の、「リアリティ構成」は、《「専業・分業のない生活＝原初」と「専業・分業の中に生きる生活＝近代」との対峙・対立の構図》や《「島づくり」という「建前」を前面に押し出す認識と「ありのまま」を人間的と考える認識とが対立の構図を見せている》などのように、優れて「ストーリー」の領域にすでに、足を踏み込んでいるのである。〈平島生活記録〉も〈個人史〉も〈精神史〉も、記述自体は、『悲しきトカラ』の中の記述から導き出したキーワードであるが、この記述における「正当化の装置」や「自己と他者との抜き差しならない人間関係」などについて、もっと、反省的に検証されなければならなかった、と言える。例えば、平島生活「記録」のレベル

では、ドキュメントの要素が強いが「精神史」のレベルでは、ストーリーの要素が強くなっている。リアリティの層においても、日常生活や象徴性のレベルでは、時間の経過に伴う、まさに「日記」としての記述、すなわち、ドキュメントの主観性が強いのであるが、これが、論理的認識と身体性のレベルでは、もともと、ストーリー的主観性が働いているようにも思われる。

『悲しきトカラ』という日記に記述されているからと言っても、主観性がすべて「ライフ・ドキュメント的主観性」で構成されているわけではない。「ライフ・ストーリー的主観性」が 38 歳の稲垣尚友氏に含まれていることは明白である。そうであるならば、「ライフ・ドキュメント的主観性」を日記の中からまず抽出しなければならない。その作業を経たうえで、図 10-1 の「リアリティ構成」を考えていくべきだったのである。まず、図 10-1 のこの欠点を認めなくてはならないのである。

もう一つの論点は、「第 11 章 彷徨するアイデンティティ」の「第 4 節 探し求めるアイデンティティ」の「メタファーとしての『旅』」「失われたものとしての『原初』」「拠点としての『島』」「存在証明としての『手』」というまとめ方を提示している部分である。このとしての A>という「言い回し」の際に、水野氏も指摘しているとおり、アイデンティティ論の問題を個人的パーソナリティ論に収斂させるのではなく、≪稲垣氏ではない社会的人間の場合にも[見られるはずの]、アイデンティティを探し求めるという共通の課題≫の解明への眼差しとして、の用語を用いているという背景がある。

そのことは、拙著では明示されていないが、水野氏に指摘されて、「メタファーとしての」「失われたものとしての」「拠点としての」「存在証明としての」という「言い回し」は、稲垣氏に対する著者(有末)の「ストーリー」づけの言葉なのである。したがって、「彷徨するアイデンティティ」というストーリーを物語るうえで、「メタファー」「失われたもの」「拠点」「存在証明」という「概念」が必要であった、というわけである。アンセルム・ストラウス氏の「GT」(グラウンデド・セオリー:「根拠づけられた理論」)⁵⁾の紹介者、翻訳者であり、GTを発展させている一人である水野節夫氏からすると、テキスト・データ(日記にしる口述データにしる)にない「概念」を持ち込むことの「質的調査の危うさ」は、批判されるのも当然であり、稲垣氏のデータとの「照合」がうまく理解できない、と言われるのも無理はないのである。稲垣氏にとって、「旅」は本当に「メタファー(隠喩)」であるのか? ヒッピー集団と稲垣氏との「相違」は、「失われたものとしての『原初』」として同一なのか? 稲垣氏の自意識やアイデンティティのあり方は「存在証明としての『手』」とどのように結びついているのか? これらの水野氏の疑問に対して、的確に答える術を持ち合わせていない。と言うよりは、逆に私自身の「ストーリー」の根拠を表現してしまった、のである。人生が「旅」に隠喩され、「旅」を人生の「隠喩」として用いる、そういうライフ・ストーリーが思い描かれているわけである。あるいは、「喪失と再生」とか、「漂泊と定住」とか、「拠点と根無し草(デラシネ)」とか、二項対立的なライフ・ストーリーが、おそらく、「私の」アイデンティティを形成しているのである。だから、「彷徨するアイデンティティ」という稲垣氏のアイデンティティ論を論じながら、≪稲

垣氏ではない社会的人間の場合にも[見られるはずの]、アイデンティティを捜し求めるという共通の課題を提示していこうと意図しているのである。前述した第一の課題とも重なるが、今回、水野氏に指摘された問題点は、論文の方向性や内包された課題が、二つの矛盾した関係性を持っていて、「こちらを立てればあちらが立たない」的なトレード・オフ関係に陥っている問題を指摘して下さった、と考えられる。これは、第四章の第二節で指摘した「生活史研究のジレンマ」とも関連しているが、応用編で私自身が展開したライフ・ヒストリー研究でも克服できていない問題点であると言える。

水野氏は、好意的に「‘ライフ・ドキュメント的主観性’論はなぜ魅力的なのか」も論じていて興味深いが、ドキュメントとストーリーの切り口の対抗的相補性について最後に考えて見たい。水野氏が言っているように、「一瞬にしてその意味が思ってもいかなかったような変貌を遂げてしまう」可能性は、人生には常に存在する。「当事者の生活史全体を統括する「意味体系」の存在が特権的位置を占めてしまうライフ・ストーリー的主観性と当事者が現に生きているその時点その状況において「意味のある記録」が重視されるライフ・ドキュメント的主観性との間のせめぎ合い」は確かに重要である。ライフ・ドキュメントは、記録の重要性だけではなく、後の人生において、当事者の「経験の解釈枠組」が構築される以前の原型としての「解釈」、「構築」である。だとするならば、ドキュメントの解釈枠組は、当事者の過去の時点での「構築」「ストーリー」を導き出す糸口になるものと思われる。いわゆる、「回心」とか「態度変更」などの「意味体系」の変更を、ドキュメントによって再構成することは、当事者の「自伝」や生活史の語りとは異なった「解釈枠組」の提示ともなるのである。もしも、当事者がその事実や経験を隠していたならば、なおのこと意味のあるドキュメントの可能性が出てくる。だからこそ、ドキュメンタリーやジャーナリズム、あるいは、歴史家の世界では、未発掘の資料による、人物の再評価や解釈の提示が繰り返し試みられるわけである。ドキュメント作家やノンフィクション・ライターも解釈のストーリーを持っている。歴史家でさえ、「歴史観」が歴史物語のストーリーづけを行っている⁶⁾。

しかし、だからと言って、常にストーリーがドキュメントの上位にあって、ストーリーが支配的に構成されているというわけではない。ドキュメントの提示は、少なくとも「その時点」での当事者の主観性の表象である。したがって、その後の人生にとって、その事実を消してしまいたく思ったとしても、しかし、その経験が彼／彼女の人生に対して、明らかに何らかの影響を与えているのである⁷⁾。その意味を汲み取る意味でライフ・ドキュメントの価値は消えることはない、と言える。

拙著『生活史宣言』を刊行した後、今年には浜日出夫・有末賢・竹村英樹[編]『被爆者調査を読むーヒロシマ・ナガサキの継承ー』（慶應義塾大学出版会、2013年）を公刊した⁸⁾。戦後、数多く実施された「原爆調査」「被爆者調査」もわれわれに多くのドキュメントを残している。この研究書は、ドキュメントの意味を再構成しながら、被爆者のライフ・ストーリーに思いをはせる作品となっている。ご一読いただければ幸いである。

【註】

- 1) 1981～1985 年ころまで、私は参加していたように思う。名称が固定されていたかどうか確かではないが、「質的データの分析研究会」のような内容で、生活史研究を含む質的データについて、理論、方法論、調査論などさまざまな角度から検討された。メンバーは、水野氏を中心として、小谷田早苗さん、後藤隆さん、大出春江さん、井腰圭介さん、渡辺牧さんなどが加わっていたと記憶している。この研究会の蓄積を水野氏が論文化したものが、水野節夫「生活史研究とその多様な展開」宮島喬編『社会学の歴史的展開』所収、サイエンス社、1986 年、147～208 頁、である。
- 2) 有末賢「語りにくいこと—自死遺族たちの声—」『日本オーラル・ヒストリー研究』（日本オーラル・ヒストリー学会編）第 9 号、特集「語りから『いのち』について考える」2013 年 7 月刊行予定。
- 3) 水野節夫氏の主要な業績の一つとして、中野卓氏の『中学生のみた昭和十年代』（新曜社、1989 年）という「日記」をデータとした水野節夫『事例分析への挑戦—“個人”現象への事例媒介的アプローチの試み—』東信堂、2000 年、がある。これは、あるライフ・ドキュメントに対しての貴重な事例分析の結果である。
- 4) 江原由美子『生活世界の社会学』勁草書房、1985 年、25～55 頁、参照。
- 5) Glaser, B. and A. L. Strauss 1967 *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Aldine Publishing Company, Chicago. (後藤隆、大出春江、水野節夫訳)『データ対話型理論の発見』新曜社、1996 年
- 6) 増谷英樹・富永智津子・清水透[著]『オルタナティブの歴史学 (21 世紀歴史学の創造⑥)』有志舎、2013 年、には、「座談会 歴史学の新しい地平！」が掲載されていて興味深い。
- 7) 詳述はできないが、最近の沢木耕太郎『キャパの十字架』文藝春秋、2013 年、では、スペイン戦争での有名な「崩れ落ちる兵士」の写真は、本物の戦場写真ではなく、キャパの作品でさえなく、恋人ゲルダ・タローによって撮影された写真であったという衝撃的な事実が、キャパの人生をその後、どのように運命づけたか、が記述されている。
- 8) 有末賢「第 1 章 戦後被爆者調査の社会調査史」浜日出夫・有末賢・竹村英樹[編]『被爆者調査を読む—ヒロシマ・ナガサキの継承—』所収、慶應義塾大学出版会、2013 年、1-34 頁、参照。

(ありすえ けん 慶應義塾大学法学部)